
彼女の存在証明

多々良ゆゑむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の存在証明

【Nコード】

N8475V

【作者名】

多々良ゆゑむ

【あらすじ】

ヒトの理性は経験できないモノの正しさを否定する。

人間の大半が魔法を使えないし、神を見たことがない。だからそれらの存在は今も否定され続けている。

それを覆すにはどうすればいいか。

『証拠を見せて、経験させてやればいい』

魔法使いや神を連れてきて、疑う者にその力を見せてやればいい。

この物語は彼女がこの世に存在していた証である。

2011/09/04 登場人物の名称を一部変更（奈雲 仁/奈雲 瑠璃↓雲出 仁/雲出 瑠璃）

一章 電磁浮遊する転校生。 1

カーテンの隙間から刺し込む朝日が、室内を淡く照らす。

床には教科書類が騒がしいまでに散らばり、勉強机でさえ物置と化している。

一方、開け放たれたクローゼットの中は、がらんと静まり返っている。

そこは、片付けられない人間の住処だった。

ドアノブが回転し、開かれた扉から一人の少女が姿を覗かせる。特別突き出た部分もなければ、崩れた部分もない。平均的で、どこにでもいそうなブレザー姿の少女は、首を振って凄惨な床の状況をあらかた見回した。

「まあ。仁さん^{ひん}ったら、こんなに散らかして」
そして、狼狽えたり怒るところか楽しそうに微笑んで一步を踏み出す。

僅かな足場に爪先一つで立つ姿は白鳥のように流麗で、次の足場に跳ぶ際になびく髪は、先まで手入れが行き届き鴉のように黒い。

小さく三回跳んだ末、この部屋の主が横たわるベッドにたどり着いた。

床や机の上があればどこまで散らかっていないながら、窓の下にあるベッドの上は不自然なまでに清潔に保たれている。

他の場所もこうなら良いのに、と思いながら少女は部屋の主を揺すった。

「仁さん^{ひん}起きて、朝ですよ」

「んう……る……り……？」

薄目で少女を見る少年の顔立ちは幼く、揺すられながら心地良さ

そんな笑みを浮べている。それを可愛らしく思った少女は、太陽よりも眩しい笑顔で応えた。

「はい。私は瑠璃るりですよ、仁さん。そして朝ですよ、仁さん。……

……仁さん？」

「……ぐう」

心地良すぎてまた眠ってしまったようだ。

「起きないと、朝ごはん食べられなくなってしまうですよー」

「うわあっ!？」

瑠璃が身を乗り出し、カーテンを開けると濃い光が部屋に降り注いだ。

仁は飛び起きて一体何事か、と前後左右を見渡してから微笑む瑠璃を見る。

「おはようございます、仁さん。着替え、ここに置いておきますね」
クローゼットから手際よく着替えを取り出し、瑠璃は兄の部屋を後にした。

「おはよう」

瑠璃が用意してくれた制服に着替え、一階に降りた僕はまず両親に挨拶をした。

二人とも既に朝食を済ませて出勤準備も終えている。どうやら僕は待たせてしまっているらしい。

もう少し早く起こしてくればよかったのに。

雲出家くもすけは共働きなので朝は慌ただしい。

「やっと起きてきた。ほら、さつさと食べちゃって」

母さんが朝食を手で指し示す。瑠璃を大きくしてかつこ良さをプラスしたようなキャリアウーマンだ。

瑠璃もいつかはこんな風になるんだろうか。想像できない。保育士みたいな仕事のほうが向いてそうだ。

「仁、そろそろお前は瑠璃なしで起きられるようになりなさい」

父さんが腕時計で時間を確認しながらそう言う。胸にぐざりと来る一言だ。妹離れすべきなのは分かっているけど、どうしても頼ってしまう。

父さんは僕の行動速度を百倍したような、多忙な人だ。こうして朝食の場で顔を合わせることは滅多に無い。

背が高くて、他人からすれば僕と同じ血が流れているとは思えないだろう。

でも、僕達四人は真正正銘の家族だ。急成長してノッポになれる可能性は捨て切れない。

「ふふっ、そうですね。少しお節介が過ぎるのかもしれませんが」

「ええっ!？」

瑠璃が微笑で父さんに同意した。それは困る。いきなり瑠璃が離れると、僕は何もできなくなってしまふ。せめて少しずつ慣らしていって欲しい。

でも、僕はもう三年生だし父さんの言う通り自立しないといけない。……なんだかモヤモヤする。

「お父さん、お母さん。洗い物は私に任せて、そろそろ出たほうが良いですよ」

「そうね。それじゃあ瑠璃に甘えさせてもらおうかしら」

「お前たちも早く出るんだぞ。新学期早々遅刻なんてみっともないからな」

「うん、行つてらっしゃい」

二人は行つてきます、と答えて早足で出ていった。
十分後、食事と片付けを終えた僕達も自宅を後にした。

「瑠璃、どうしてもつと早く起こしてくれなかったんだ。またと父さんと母さんに迷惑かけちゃったじゃないか」

「まあまあ……落ち着いてください。今日の失敗は忘れて明日頑張りましょう。仁さんならきつと大丈夫です」

こんな風にモヤモヤをぶつけても、瑠璃は反発せずに笑っていてくれる。本当に良い妹だ。出来ることならずっと僕のそばに居て欲しい。でも、それがお互いの為にならないことは明らかだ。

だから、少しずつでいいから妹離れしないと……。

「今日は風もあつてちょうどいいお天気ですね。既に桜が散り始めているのが少し残念ですが」

「ああ、そうだね」

通学路に咲き並んだ桜を見て瑠璃が言った。

コンクリートで整備された道の両脇に植えられた桜は今、一年の中で最高に輝ける時期を迎えている。しかし、風のせいであまり長くは続かないだろう。

花卉が制服の中に入つてこないように、僕は服装を正した。

「なあ瑠璃、父さんが言つてたことだけど……」

「ああ、あれですか？心配しないでください。私は――」

「このままじゃダメなんだって、心のどこかで思つてた。今朝父さんに言われて決心がついたよ。これからはなるべく瑠璃に頼らないようにする。だから協力して欲しい」

瑠璃が眉を顰めた。心配してくれているのか。僕は大丈夫だ。初めの方は助けてもらうかもしれないけど。

僕のことを汲み取ってくれたのか、瑠璃がにっこり笑った。

「わかりました。でも、無理はしないでくださいね。私はいつでも仁さんの力になれますから」

「ありがとうございます」

瑠璃の頭を撫でてあげたくなかったけど、僕は五つ下の妹より背が低い。これでは様にならないので止めておく。

ああ、もっと兄らしくなりたいなあ。僕のことを『仁さん』と呼ぶのは、兄として見れないせいなのかもしれないし。

そんな事を考えていると、背後から足音が駆け寄ってきた。

「おーっす！ 瑠璃ちゃん、仁はどこだ？」

振り返ると、憎たらしいまでに背の高い男がそこに居た。

小学校時代から交友が続いている俗に言う腐れ縁、沢田遼太郎さわだりょうたろうだ。

「おはようございます。見下げてご覧ください、それが仁さんです」

「おう、小さすぎて見えなかったわい」

笑顔でそう言う瑠璃が恐ろしい。僕を見下ろす沢田が憎い。

「沢田、あとで覚えとけよ」

「おー怖い怖い」

僕は沢田を見上げて思いつきり睨みつけた。首が疲れる。

コイツも昔はチビだったのに、今ではバスケット部のキャプテンだ。

僕と沢田、どうして差がついたのか。それは未だにわからない。

僕達は再び歩き始めた。

「しかし瑠璃ちゃんも変わってんなあ。俺が妹ならダメ兄貴の世話なんて願ひ下げだぜ」

「仁さんはダメじゃありません。やれば出来る子なんです！」

「そうだぞ、僕はやればできるんだ！」

うん、瑠璃が言うならきつとそうなんだ。

「ま、まあ仲睦まじいのは良い事だな……。俺なんかここ数日ネーちゃんと全然話してねえし」

「何か怒らせるようなことしたんじゃないの？」

沢田のお姉さんは確か今大学生だったかな。

凄く美人でスタイルが良くて、ここだけの話僕の初恋の人だ。あの人を『ぎゅっ』としてむにゅむにゅする』妄想をした数は自分の指でカウントできない。

「さあな。まったく女心つてのはわかんねーぜ。あー瑠璃ちゃんみたいな妹欲しいわあ」

僕も沢田のお姉さんのような姉が欲しい。瑠璃は渡さないけど。

「うふふ、一日くらいなら遼太郎さんの妹になっても良いですよ」「いやいや、仁の側に居てやるべきだぜ。瑠璃ちゃんのいないコイツの日常生活なんて想像したくねえ」

「何を言う。僕は今日から極力瑠璃に頼らないように生きて行くんだぞ」

「げげえっ、マジかよ!？」

沢田は心の底から驚いているらしい。失礼なやつだ。

そうこうしているうちに分かれ道に差し掛かった。

瑠璃は^{ゆずりほ}杠葉尾中学だから左折して、僕と沢田はこのまま真っ直ぐ進んで杠葉尾高校に向かう。

「それでは、仁さんを頼みます」

「おう、頼まれた!」

僕はまだまだ子供だ。まずはこの二人に認められるよう頑張ろう。

あ、そういえばクラス替えがあるんだっけ。沢田と離れたらどうしようかな……。

とりあえず良い機会だ、と前向きに考えよう。

一章 電磁浮遊する転校生。 2

「また同じクラスとはなあ！ よかったよかった！」

結果を言つと、僕と沢田は同じクラスになった。ひとまず安心だ。それは沢田も同じらしい。

「そうだね。でも去年も同じクラスだった人が多いなあ」

既に席のほとんどが埋まっていて、グループで談笑している。

大体が見知った顔だ。三年目となると仕方ない気もするが、新鮮味がない。

今沢田が座っている僕の席は、教室のちょうど真ん中あたり。

窓の外を見て黄昏るフリもできないし、黒板を見上げて首を痛めることもない、微妙としか言いようのないポジションだ。おまけに僕の身長は座っている沢田にさえ勝てない。

たいてい僕は一度目の席替え以降、前列に固定される。名前の順番で座らされるこの時期やテスト期間は、いつもと違った教室を見られるささやかな楽しみだった。

それが潰えた今、僕は何を楽しみにすれば良いんだろうか。そう、今日の夕飯を楽しみにしよう。昨日は野菜メインだったから、今日は魚か肉つてとこかな。朝ご飯を食べたのにお腹がすいてきた。

「お、そうだ。お前春休みの宿題やってるよな？」

「うん」

「見せてくれ！ 練習が忙しくてやる暇がなかったんだ」

「沢田、それは甘えだよ。僕は毎日昼の二時起きなのに終わらせただからな」

「お前が言うか。くっそー、勉強だけは人並みにできやがって」

「どうせ今渡したって間に合わないだろ。後で貸してやるから、一

日遅れて出せばいいよ」

「サンキュー！ お前が友達で良かったぜ」

僕も提出が一日遅れてしまうが、些細な事だ。

突然教室が静まり返った。

一体どうしたんだろ。周りを見ると、さっきまで個別のコミュニケーションに閉じこもっていた誰もが一樣に入り口を見ている。僕達もそうしてみた。

「こ、こりゃあ…… すごいな」

沢田が辛うじて言葉を搾り出す。僕はそれに答えることすらできない。

美人さんがそこに居た。

目鼻立ちがくつきりしていからハーフなのかな？ 体型もその辺の女子より起伏があつて、モデルみたいだ。沢田のお姉さんと言いたい子と言ひ、僕はこういう女性に弱いなあ。

切れ長の目で僕達全員を一瞥すると、教室に入ってきた！ どうやらあの子は僕と同じクラスらしい。羨む程すらりとした脚を動かして、窓際の最後列の席まで歩くと、そこに座って窓の外を眺めだした。普通なら痛々しいはずの黄昏る体勢が様になっている。

だけど、表情からは一欠片の感情も感じられなかった。それはまるで氷の彫刻のようで人間味がない。だけど、背中あたりまで伸びた明るめの茶髪はふわふわウルウルで、しなやかなカールを描いていた。それは暖かくどこか儚げで、人間味がある。不思議な人だ。

彼女が席について暫くすると、止まっていた談笑が再開された。ジロジロ見るのは失礼だと思ったのだろう。

「沢田、あの子知ってる？」

「知んね……初めて見た」

「ハーフなのかな。すごく綺麗だよね」

「だなあ……」

沢田がぼんやりしている。あの子に惚れでもしたのかな。沢田のお姉さんと大まかなタイプが似てるし仕方ないか。

「沢田のお姉さんより良いかも」

「そっかあ？ 俺以外への人当たりはウチのネーちゃんのが良さそうだぜ……」

「シスコンめ、さっさと彼女作りなよ」

「ッ！？ てめえ、人のこと言えんのかよ！」

「僕はシスコンであることを恥じたりはしない、君とは違うんだ。妹も姉も最高だよ」

「このインモラリストが。どっかに隔離されちまえ」

「違う、僕は背徳者じゃない。限りなくラブに近いライクなんだよ！ ギゅっとするまではOKだけど、むにゅむにゅ以上は流石にアウトだ」

「意外と節操あるな。むにゅむにゅ以上については訊かないぞ？」

「ああ、そこから先はR指定だからね」

そんなこんなで時刻は九時半——始業式の十分前だ——、生徒が一気に移動し始めて校内は騒然となる。体育館までの道が混雑することはわかりきっているので、僕達はこのまま教室に留まる。固まってるのろろ動くななんて、馬鹿らし過ぎて耐えられない。

暫く待つと、ようやく廊下が空いてきたので僕達は席を離れる。

教室にはもう僕達しかいない。

「戸締りは別にしなくてもいいよね」

「ああ、みんな貴重品は持って行ってるだろ」

教室を出る際に何気なく窓のほうに目をやると、あの子がまだ居た。

どうして気付かなかったんだろう。初めて見たときはあれ程存在感があったのに、今では路傍に咲く花のように稀薄だ。それに、もう時間がないのにどうして黄昏る体勢を維持しているんだろう。飽きないのかな？

そんな彼女に、とても興味をそそられた。

「ねえ、どうして外ばかり見ているの」

僕が傍に行つて声をかけると、眠たげに細めた目をこちらに向けた。

「……」

かちりと視線が交差するけれど、彼女は一言も発しない。

「早くしねえと始業式始まるぜ？」

沢田がそう言うのと、始業式という言葉に反応を示した。

「……そうか。始業式か」

そう呟いたかと思うと突然立ち上がり、颯爽とした足取りで教室から出ていった。

「一体なんなんだアイツ」

「さあ。僕達も早く行こうよ」

時計を見るとあと三分、急いで教室から出ると体育館と真逆の方向に歩く彼女がいた。

「体育館はそっちじゃないよ」

彼女が回れ右をして、僕達のもとに戻ってくる。

「……体育館というのは何処にあるんだろうか」

僕と沢田は互いに顔を見合わせた。

体育館といえば、その裏で告白が行われたりする学校の象徴と言えるスポットだ。その場所を知らないなんて……。

「えっ、あつちだけど」

僕は彼女が居る方向の反対を指さす。このまま真っ直ぐ突き当たりまで歩き、その出口から出て、すぐその走行口にある階段を上れば体育館だ。二階にある渡り廊下から入るのもアリ。

「そうか、ありがとう」

僕達三人は体育館へ向かって歩き始める。しかし、離れていく足音を聞いて再び足を止めた。

「そっちは南校舎だよっ！」

「そうか、こっちじゃないのか」

本当になんなんだこの人は！

僕と沢田は何度も彼女の間違いを正し、始業式に盛大に遅刻した。

一章 電磁浮遊する転校生。 3

きつく咎められることもなく始業式を終え、僕達は教室に戻ってきた。

「今更こんなこと言う必要性は感じられんが言っておく。俺がお前らの担任の須藤^{すどう}守^{まもる}だ。自己紹介おわり。岡本、こっちまで出てこい」
教卓に立ち形式的な自己紹介を済ませた担任は、窓の方を見てその名を呼ぶ。

がたんと椅子を引く音がして、ふわふわの茶髪を揺らして出てきたのは、僕達が始業式に遅刻する原因となった女の子だった。一部の例外を除いてほぼ全員の視線が集中する。

その例外というのは、友人に借りたであろう宿題を懸命に書き写す人たちだ。

「今年からお前らと一緒に勉強することになった岡本^{おかもと}海夏^{みなつ}だ。

ヨーロッパで十五年間を過ごし、今年日本に帰ってきたらしい。ま、帰国子女って奴だ。わからない事が多いだろうから、色々教えてやってくれ」

黒板に彼女の名前が記される。ハーフっぽいからカトリーナやカミーユみたいなのかと思っただけ、そうではないみたいだ。

「おい岡本……」

「なんだそれは……ああ、……か」

須藤先生と岡本さんがこそそと何かを話している。妙に打ち解けた雰囲気だ。先生はなんだかんだで取っ付きやすい人だからかな。クラスメイトの視線をもろともせず、岡本さんが話し始める。

「初めまして岡本海夏だ。シンデレラがガラスの靴を落とす、白雪

姫の棺の近くを王子が通りかかる——今日の出会いはそれらに引けを取らない奇跡だろう。こうして君たちに出会えたのはワタツミ様のお導きに違いない。これを機に親睦を深めていこうではないか。挨拶おわり」

教室に僕の拍手が響き渡る。他人の自己紹介の後はこうすべきだと僕は思っただ。

？ワタツミ様？が何か知らないけど、須藤先生が『あちゃー……』とでも言いたげに片手で目を覆い天を仰いでるけど、そうなんだ。なのに僕以外は誰も拍手していない。

「岡本、もう戻っても良いぞ」

手を下ろし、ため息をついた後に先生がそう言った。席に戻る岡本さんはどこか満足気な表情をしていた。

「んじゃ、宿題集めつぞ。いちばんうしろの奴」

一番後ろの席の人が宿題を集めながら前に出ていく。宿題を写していた人は力尽きて机に突っ伏していた。やはり間に合わなかったようだ。

「さて、やることねーし早めに終わらせとくか」

「センサー今のうちに委員決めとこうよ！」

ようやく帰れるかと思いきや、こんな声が上がった。

厄介ごとは早めに片付けておくに限る、という人が多いのか賛成の声が多数上がる。僕も賛成だ。

「そうかそうか、じゃあ委員決めつぞー」

黒板から岡本さんの名前が消え、委員が記入されていく。今年は卒業式に関する委員もあるので、去年より多いみたいだ。

順調に項目が埋められ、ついに残るは一つ——クラス委員のみになった。

大抵の場合、押し付けあって長引くから一番初めに決められるん

だけど、須藤先生は自身が立候補した場合しか認めない。……あ、これを利用して授業を潰すという手もあったなあ。明日の方が良かったかも。

教室が沈黙してかれこれ十五分。ついに須藤先生が何処からパイン椅子を持ってきて座ってしまった。

廊下側の窓越しに、他のクラスの人が見える。一体いつになったら帰れるんだろう。そういえば今日はクラブ説明会があるんだっけ、沢田大丈夫なのかな。帰宅部の僕には関係ないけど、キャプテンの居ないクラブ説明会というのは格好がつかない。

そうだ、僕がクラス委員になればいいんだ。

そうすればみんな早く帰れるし、クラスの代表を務めるということは自立する為の良い経験になるに違いない。早速僕は席を立ち、発言する。

「先生、僕がやります」

「それなら、私にもクラス委員というのをやらせて欲しい」

みんなの視線が僕に集中したような気がしたけど、気のせいだった。だって僕も含めたクラス全員の視線は岡本さんに集中してるんだ。そんなことあるわけない。

「うし、雲出と岡本で決定くもすだな。」

お前ら、せっかく立候補してくれたんだから困ってる時は助けてやれよ。任せつきりとか一番ないパターンだからな。……さて、早速クラス委員に終わりの号令でもしてもらうか」

「きりいいいッつ！！——礼ッ！！」

僕は高らかに叫び、初仕事を終えた。

「おいおい大丈夫かよ！——瞬俺が立候補しようかと思っちまった

ぜ」

挨拶を終えると沢田が、犯人を見つけた刑事のように詰め寄ってきた。

「大丈夫だよ。これくらいできなきゃ瑠璃から自立できないし」

「でもなあ、普通なら女子がフオローしてくれそうだが肝心の女子が転校せ——」

「私がどうしたんだ？」

「うおオっ!？」

沢田が驚いて身体を強ばらせる。いつの間にか岡本さんが沢田の真後ろに居た。この人も、沢田ほどじゃないけど背が高いなあ。

「いやあ沢田がね、僕達がクラス委員じゃ心配だと言っんだ」

「そ、そうだ、早くクラブ説明会いかねーと！ 仁、宿題ブリーズ！」

僕がカバンから宿題を取り出すと、沢田はそれをひったくって逃げるように教室を出ていった。さて、僕も帰るとしよう。

「こまったこまった……」

そう口に出してしまうほど僕は困っている。

教室を出て、昇降口で靴を履き替え校門を出たは良いが、何故かすれ違う人がもれなく僕を二度見していく。もしかして、パジャマのまま学校に来てたり……それはないか。瑠璃は時々ジワルだけど、そんな間違いを見て見ぬふりするほどじゃない。すぐに指摘してくれるはずだ。

それなら原因は他にある。

僕の背があまりにも小さくて思わず二度見——失礼だなあっ！
好きでチビやってるわけじゃないんだぞ！ この可能性はナシだ。

それにしてもこの視線、ムズムズする。例えるなら、変なことを書かれた紙を背中に貼り付けられているときのようだ。誰もが僕を見ているしかし、その原因は判然としない。

それは今の状態と共通していた。

——もしかして……

僕は後ろを向いた。

「そうだ思い出した。君に訊きたいことがあったんだ」
岡本さんがいた。

なんと、彼女はどこぞのRPGのように、今まで僕の後ろにぴったし付いて来ていたらしい。全く気づかなかった。

「訊きたいことって何さ」

僕は美人さんと一対一で話す恥ずかしさと、さっきまで受けていた辱めから逃れる為に少し強めに出る。

「本が沢山ある場所に行きたいんだが、それは何処にあるんだろうか」

岡本さんは僕の態度を歯牙にもかけず、眠たげな目を真っ直ぐ向けてきた。海のように青く深い瞳に引き込まれる、そんな気がしてドキツとしてしまう。

心臓が早鐘を打つ。

苦しい。僕は胸元を押さえて地面に膝をついた。

「……あ……っ」

息ができない。

身体が『空気を吸う』という行為を拒絶する。

肺が得体の知れない液体で満たされたかのように張り詰める。

それを吐き出そうとして咳き込むと、余計に辛くなる。

僕は溺れる人のようにもがき苦しみ、海岸に打ち上げられた魚のように地面をのたうち回った。

只事ではない事態を察した人達が集まってくる。

暴れまわる身体が誰かに抱きとめられた。岡本さんだ。酷く驚いた様子で僕を見ている。

僕の意識は、彼女の瞳のように深い海に沈んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8475v/>

彼女の存在証明

2011年9月5日00時37分発行